

今回の4泊5日の北京研修では、北京大学と清華大学を訪問し、施設やカリキュラムについて学ぶと同時に、学生たちと交流した。中国本土を訪れるのは初めてで、料理や文化が好きなため楽しみにしていた一方、安全面を心配する声も周囲にあり、これまでの海外渡航よりもやや緊張していたように思う。今年2月下旬に実施された台湾研修では常に通訳の方が同行していたため、今回は去年から習い始めた中国語に初めて本格的に触れる機会ともなった。短い期間ではあったが、広大な大地を眺め、多様な背景や考えを持つ人々と触れ合うことで、視野が広がる貴重な研修となった。

北京大学と清華大学はいずれも広大な敷地を有し、学ぶ場と生活の場が一体となった大学生活のスタイルが印象的だった。私は現在三鷹にある東京大学の寮に住んでいるが、すべて個室で部屋にはシャワーやユニットキッチンが備えられている。そのため、交流会などに自ら参加しない限り、住人同士が自然に知り合う機会は少ない。このように個人のプライバシーが確保される寮の形態も気に入っているが、異なる関心や背景を持つ人々と出会う機会は意識的に作らなければ得られない。否が応でも顔を合わせる機会が多くなる中国の寮生活を見習って、私も同じ寮に住む人々とより積極的に交流していきたいと感じた。

中国で特に印象的だったのは、大学内外を問わず、新旧さまざまな建築や空間に中華風のデザインが取り入れられていたことだ（写真）。中国の大学生に尋ねると、中華風の意匠が施された建物は人気があるという。一方日本では、外国人が多く訪れる場所や伝統的な行事・活動が行われる場所では和の要素が取り入れられているものの、一般的な商業施設やビルでは内装・外装に和のテイストを施したものは少ないように思う。ただ、モール内の蕎麦屋など、日本らしいものを扱っている店舗では和風のデザ



インが用いられることが多い。日本では和風なら和風、洋風なら洋風、と明確に分ける傾向があり、それに対して中国は伝統と現代の要素を融合させることが多いのかもしれない。しかし、こうした見方も、日本文化の中で育ち、日本の建築を基準として他国の建築を見る私自身の視点に基づいている可能性が高い。実際、日本でも一般的なビルの中に神棚があったり、住宅にフローリングと畳の部屋が共存していたりする。モール内の蕎麦屋も、モールと蕎麦屋を別々に捉えれば西洋的と日本的が明確に分かれているように見えるが、一つの空間として捉えれば和洋折衷の形になっているとも言える。そもそも、和洋折衷という言葉が普及しているということは、日本的なものと外国的なものを折衷しているものが普及しているということかもしれない。私が西洋的・近代的と感じるものでも、異なる文化的背景

を持つ人が見れば日本的と感じるのかもしれない、私が中国で感じた新鮮さを、日本に来た人々も同様に感じているのだろう。同じものを見ても、何を感じるか・感じないかはそれまで蓄積されてきた自身に因り、今回の旅ではそのことを改めて実感させられる場面が多かった。

なかでも特に視点の多様性を感じたのは、北京の景色と、それをもとに「背景」をテーマに制作された学生の作品だった。同じ場所を訪問しても同じ風景を想起し描き出す人はおらず、見たものから引き出すものも異なっていた。「固定的な視点を持つ一人の人間から、統一的に把握され」た「風景」が表されていたが、その人が抱く言語化しがたい印象や思考方法を形作ってきた経験、捨象してしまった諸々は私がたどることのできないもののため、その人が描く風景を私が再構築しようとしても、結局はその人のメガネを借りて私が見た風景なのかもしれない。しかし、ものの見方を根本的に別のものにはできなくとも、その人が見たレンズから外を見えるということは、新たな考えや言語化できていなかった感覚・自分が見たものとの差に気づくきっかけになる。このことは、中国や日本の学生との会話でも同様で、一つのテーマについて話していても、考え方や意見はそれぞれ異なっていた。他者という異文化との対話は、自分の思考を掘り下げ、世界を広げる機会となる。今回の研修を通じて、その大切さと楽しさを改めて実感した。

初めての中国本土滞在は毎日密度が濃く、様々な情報や言葉で頭がいっぱいになったが、考えること・知ることの楽しさを実感できた旅だった。北京大学や清華大学という日本とは異なる大学のスタイルに触れることは刺激的であり、エクスカージョンでは頤和園や万里の長城を訪れ、広大な土地と長い歴史を肌で感じる事ができた。中国語が話せずもどかしい思いをする場面もあったが、それが中国語学習のモチベーションを一層高めるきっかけとなった。同時に、多様な視点を持つ人々と交流することの意義を改めて実感した旅でもあった。